

自他境界は欲望する

——安部公房「飢えた皮膚」論——

岩本知恵

はじめに

首尾一貫した自他境界／アイデンティティを表すかに見える皮膚は、しばしば変形する。一九五一年に発表された「飢えた皮膚」^①は数ある変形譚の中でもとりわけ「皮膚」に焦点化された作品である。作中における変形は皮膚の変色という形で現れる。安部の変形における皮膚の重要性を指摘した谷川渥は、「飢えた皮膚」について「変身」が直接的に肉体の表層、つまり皮膚に現れる」と、変形譚として論じている。また小林治も「飢えた皮膚」を「赤い繭」と並列させ同様の構成を持った変形譚であると位置づけ、変形を「何によっても代替できない切実な身体性に根ざした思いを持った人間が、その思いの極みに遭遇するもの」^②であると述べている。

先行論が示唆するように、「飢えた皮膚」が変形譚であるならば、この作品は身体認識の変容のプロセスを描いている側面があると言える。ただし、本作品の変形は身体の形の変容ではなく、あくまで変色であり、他の変形譚と比べて異彩を放っていることには留意したい。つまりここで行われているのは身体の「形」の認識変容ではなく、「皮膚」の認識の変容なのである。「おれ」や「女」の認識の変容によって変色する皮膚は、身体の形の変形という身体境界の問い直しとは別のプロセスによって皮膚／身体境界のあり方を問い直す契機となるのではないだろうか。

この作品は、極限的な飢餓状態にある「おれ」が、資本家の夫人である「女」を騙して阿片中毒にし、財産を奪うことで「復讐」をする物語である。「おれ」の「女」に対する行為を谷川は「いたぶりながら」と表現し、小林は「復讐劇」と明言する^③。この復讐には重要な要素として「女」と性交すること（レイプすること）^④が含まれてきている。「おれ」は「女」に復讐することで裕福になり、また、「おれ」は「女」を阿片中毒にすることで屈服させ支配する。レイプが「おれ」から「女」への支配と暴力を表現するものであると考えた時、「おれ」の欲望は支配欲や金銭的な欲求と結び付いた性欲として読むことができる。

しかし、「おれ」の欲望ははたして「復讐」のみに収斂されるものなのだろうか。というのも、「おれ」の欲望を「復讐」とのみ捉えるのではなく、「おれ」の皮膚へのこだわり、そして「飢え」の描写が説明できなくなるからだ。描写される性交と「おれ」の欲望は、服を剥ぎ取ること、裸にすること、かつ「保護色病」という架空の病気によって皮膚を変色させることに焦点化されている。一番の目的は性交やレイプそのものではないかのように思われるのだ。また、性欲や復讐への欲望以上に「おれ」が切迫して感じているのは食欲のほゞである。作品を通して繰り返されるのは「おれ」の「飢え」の描写である。特に冒頭部分では、飢えていながらもかわらず身体が食物を受け付けず嘔吐してしまうという極限状態が描かれている。にもかかわらず、「おれ」の欲望は飢えを満たさそうと

することよりも、「女」に復讐することに向かつていく。前述したように、「女」への復讐は性交であり、性交によって服を剥ぎ皮膚に働きかけることである。

以上のような皮膚と飢えに対する描写に着目した時、「おれ」の「復讐」は、単純に性欲や支配欲に依拠したものであると結論付けられなくなる。むしろ「おれ」の行動や欲望は「復讐」という言葉の印象とは別のところにあるのではないだろうか。

本稿は、「おれ」の執着する「皮膚」について注目することで、「復讐」という言葉の印象を保留し、「おれ」の行動や欲望にどのような認識が介在しているのかについて考察することを試みるものである。作中における皮膚表象の持つ意味合いについて、また皮膚が自己の境界であることから「おれ」のアイデンティティ認識について読み取ることで、この作品が皮膚という場を通してどのような実践を行い得たのかを明らかにしたい。

一 皮膚について

「おれ」の性交は衣裳を剥ぎ取ること、裸にすること、かつ皮膚を変色させることに焦点化されていた。衣裳と皮膚の関係について、「おれ」は「保護色病」についての説明の中でこう意味づけている。

衣裳とは何か？　　いうまでもなく人間の皮膚の働きの不備を補うために出来たものです。それには、寒さをしのぐというような生理的な目的の他に、社会的な役目があるのです。例えば顔の表情は、人間関係の処理に必要であり、未開人の文身や身体変工は氏族的なもの、あるいは階級的なものの表示のために必要です。／衣裳は本

当に魔術です。人間が生きているのではなく、衣裳が生活しているのではないかとさえ思われます。(六三・六四頁)

一五二

「おれ」が剥ぎ取ろうと望んでやまない衣裳は、「人間の皮膚の働きの不備を補うために出来たもの」、あるいは、「氏族的なもの、あるいは階級的なものの表示」であると語られる。すなわち、皮膚の延長であり不備を補うものであると同時に、自己の社会性や階級性を示すものとして位置づけられているのである。注意したいのはこうした衣裳認識が、「衣裳がアイデンティティを示す」というものではないことだ。トマス・カーライルが『衣服哲学』で述べるように衣裳は、人間のそれぞれの社会的な階級や役割を表すものではなく、むしろアイデンティティを作るものとして理解される。「人間が生きているのではなく、衣裳が生活しているのではないかとさえ思われます」という「おれ」の述懐からは、衣裳や制服を着ることによって、それぞれの衣裳が持つ階級性や役割が内面化され、そのためそれに応じた振る舞いや態度を自己にも他者にも要求する、といった事態が読み取れる。

このような衣裳の特徴は、同時に皮膚の特徴でもあると語られる。衣裳が皮膚の延長であるとされるため、皮膚もまた上記のような性質を持つているのだ。作中で例示されるのは「顔の表情」や「文身や身体変工」であるが、最も印象的なのは「保護色病」の設定であろう。「保護色病」自体が、皮膚の延長たる衣裳の役割を再び皮膚の上にあらわす病として、「おれ」に設定されているのだ。

衣裳を剥ぎ取ることを、衣裳によって付与されるアイデンティティを剥ぎ取る行為であると捉えるならば、「おれ」の欲望は同時に皮膚を剥ぎ取ることでもある。「おれ」はおそらくアイデンティティ観念に対する働きかけを希求しているのだ。

このことについて、アンドレア・ドウォーキンとは「皮膚の喪失」で安部公房の作品について論じながら、性交において「皮膚がなくなることが時としてある」と述べる^⑦。皮膚が物理的にも精神的にも自他の境界であるために「皮膚を喪失」するようなセックスをする時自他境界は曖昧になり、自我は自我を保てなくなるのである。ドウォーキンは、社会的な慣習によって意味づけられる自我以前の「裸性」を設定し、「セックスは、無垢な当初の裸性を追想するもの」であるとするとする。

だが、ここで問題になってくるのは、「無垢な当初の裸性」などあるのだろうかということだ。「おれ」の希求しているものがアイデンティティ観念に対する働きかけであり、アイデンティティや社会的な階級が問題化されない地平へ行くことであつたとしても、何らかの「本質」を指定することが有効であるとは思えない。覆い隠す衣裳や皮膚という認識は、「裸性」であれ「物体」であれ「魂」であれ、なんらかの隠されるべき本質を指定している。「おれ」はアイデンティティ観念に対する働きかけを行うために皮膚を剥ぎ取ることを希求するが、その行為を「隠されるべき本質」へ至る行為だと認識すると、また何か別の「本質」という「アイデンティティ」の出現を促すことになってしまうのだ。

ならば、皮膚の剥ぎ取りをどのように捉えれば、本質の指定を避けることができるのだろうか。「おれ」の皮膚を剥ぎたいという欲望にはどのような皮膚認識が介在しているのだろうか。皮を剥ぐ欲望が一方では拷問や暴力として機能しながら、一方では解放のイメージを持っている点を確認したい。

二 脱皮と皮剥ぎ

皮を剥ぐことは一方では拷問や暴力のイメージを根強く持っている。

自他境界は欲望する

しかし一方では脱皮という解放のイメージをも持っていた。その皮膚からの解放というイメージは、医学の発展に伴い付与されてきたようだ。クラウディア・ベンティーンは「皮剥ぎと知の生産が密接に結びついていた」^⑧と述べている。

人体解剖はタブー侵犯的な意味合いを持っていた。その意味合いを転じさせるのが皮膚を医学や知を妨害する被膜としてとらえる認識である。皮膚は内に筋肉や内臓を隠している。ベンティーンの分析では「解剖標本みずからが皮膚を剥がしていたり皮膚を持ち上げてみせたり」「生皮を剥がれるものがみずから進んで皮膚の中から外へと脱け出す」ことによって皮剥ぎのタブー性を隠蔽する実践が芸術によってなされていた。その過程で皮膚を剥がれる身体は苦痛に耐え本質的な身体を手に入れるという英雄的な意味付けを与えられ、反対に皮膚は脱ぎ去るべき邪魔なものという意味を与えられる。

皮を剥ぎ取られる／脱ぎ去る身体に与えられる英雄的な意味合いからも明らかのように、皮を剥ぐという行為は苦痛を伴い、拷問や罰としても機能している。この刑罰としての皮剥ぎは芸術によって題材とされる際に、拷問による身体への書き込みという形で捉えられ、皮を剥がれる身体は啓蒙される身体として意味づけられていく。ベンティーンは拷問や殺害における皮剥ぎを「権力のもつとも過酷な書き込み」と位置付けた後、「他方それは、解放あるいは(暴力的な)変身の行為の寓意となっている」と指摘しているが、そうであれば皮剥ぎに付与される暴力的なイメージと解放のイメージはここにおいて接合されたことになるのではないだろうか。つまり皮を剥ぐという暴力が、拷問や刑罰による身体への書き込みとして意味づけられることで、書き込まれた身体は苦痛を伴いつつも啓蒙される。その啓蒙が皮を剥ぐという、邪魔なものを脱ぎ去るイメージと接続することで、脱皮という解放のイメージが新たに付与

されていく。

これは逆説的にいえば、身体への書き込みが邪魔な被膜としての皮膚を生み出し、身体を空洞なものとして意味づけていくということでもある。ジュディス・バトラは、フーコーの『監獄の誕生』における身体の上に書き込まれる精神を参照しながら、身体への書き込みが身体を「意味づける欠如」として生み出すことに言及している。

身体の「なかにある」と考えられている内なる精神という比喩は、身体のうち書き込まれることによって意味を与えられる——たとえ精神の意味づけの一時の様態が、非在としての精神とか、潜在的な不可視性としての精神であるとしても。身体を生命力に満ちた神聖な囲いとして意味づけることによって、構造的な内的空間が、結果として生みだされる。そのとき精神は、まさに身体には欠如しているものである。したがって身体は意味づける欠如として、姿を現す。

(ジュディス・バトラ『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』)

身体は精神を欠いたものとして生み出される。書き込みによって精神を与えるという比喩は、書き込まれるための空白や欠如を前提とした身体を作り出すものである。魂が中に入れられるべき覆いとしての、中が空洞の身体イメージがここで作り上げられる。

一方で皮剥ぎは身体への書き込みでありながら、書き込むという行為とは別の、剥ぎ取るという行為が問題化される。皮膚を剥ぎ取り中身を露わにしようとする行為は、遡及的に剥がされるべき邪魔な皮膚を作り出すものである。この邪魔な皮膚というイメージは、中に真の魂が隠さ

れていることを想定させる。ここで身体と皮膚は双方ともに内に魂や自己や精神を入れる覆いとしてのイメージを付与される。書き込み、剥ぎ取りという正反対のイメージを通して身体も皮膚も同時に、欠如でありながら魂を隠す邪魔な覆いとしての意味づけがなされるのである。

さて、一方で皮膚こそアイデンティティであるとする自己としての皮膚認識も存在している。ベンティーンは、自己を覆う皮膚と自己としての皮膚を対立構図として把握した上で、「真の自己」たる皮膚という観念は、特徴を示し暴露する表面を他者の眼差しから隠したい、という願望と、裏腹の関係にある」と指摘する。自らを秘匿したいという願望は「恥じらい」であり、ここでの「真の自己たる皮膚」とは「裸」を意味していると考えられる。裸である皮膚を隠すために必要とされるのが「第二の皮膚」としての衣裳であり化粧や仮面であるとベンティーンは述べる。

しかし、「自己としての皮膚」を「第二の皮膚」で隠すというこの構図は、真の自己や魂を隠す「自己を覆う皮膚」という構図と非常に似通っている。そうだとすれば、衣裳が「第二の皮膚」として意味づけられるのではなく、むしろ皮を剥ぐという行為においては皮膚こそ「第二の衣裳」として意味づけられているのではないだろうか。主張したいのは、皮膚の延長として衣裳があるのではなく、衣裳の延長としての皮膚が、皮を剥ぐという行為の意味づけによって生産されているのではないかとということである。

皮膚を剥ぎ取り中身を露わにしようとする行為は、遡及的に剥がされるべき邪魔な皮膚を作り出すとともに、隠されるべき自己や魂を作り出すものであった。この、皮膚を剥ぎ取って「真の自己」を露わにするというイメージは、衣裳を剥ぎ取るというイメージと連なっている。恐らく、「真の自己」としての恥じらうべき裸は、隠す衣裳によって生産されている。「第二の衣裳」としての皮膚、あるいは「第二の皮膚」としての

衣裳はこのように双方ともに隠されるべき「真の自己」や「裸」を作り出すものである。衣裳によって付与されるアイデンティティは着脱可能なものではなく、裸を作り出すことで身体化されるものである。

「おれ」の欲望は付与されたアイデンティティを剥ぎ取り、女を「物体化」することであった。「物体化」は「純粋に皮膚だけの存在に還元」と語られるように、純粋さや本質的なものを意味するもののものである。衣裳や皮膚を邪魔な被膜として捉え、内なる「真の自己」を露わにするイメージがここで働いている。これはむしろ「剥ぐべき衣裳」「剥ぐべき皮膚」というイメージが、内に隠されている「真の自己」を遡及的に作り出したに過ぎない。しかし、内に隠されている「真の自己」が想定されることで、衣裳を剥ぐことや皮膚を剥ぐことには啓蒙的な意味合いが付与されてしまう。ここで行われている衣裳や皮膚を剥ぐ行為としての性交は、脱皮という変身や解放のイメージでありながら権力の書き込みの行為なのである。

それでもなお、「おれ」がアイデンティティを衣裳や皮膚として剥ぎ取り可能なものであると認識する時、アイデンティティは非本質化する。剥ぐべき衣裳／皮膚は「偽りの覆い」と「真の自己」の二分法を作り出すものではあるが、衣裳を剥いでも皮膚が、皮膚を剥いでもまた別の皮膚が、目の前に現れることによって「おれ」は皮膚を剥ぎ続けねばならなくなる。この繰り返しは「偽りの覆い」としての皮膚を何重にも作り出して、その結果「真の自己」を奥へ奥へと隠し続ける行為でもある。皮膚をいくら剥いでも「真の自己」が露わになることはない。ここで、身体は皮膚だけになる。「おれ」の衣裳／皮膚を剥ぎ取りつつけるという行為は、それが何度も繰り返されることで「偽りの覆い」と「真の自己」という二元論を無効化し、両者の間の境界認識に問い直しを迫るものなのである。

三 侵入する病と「保護色病」

皮膚に対する「おれ」の認識の一つとして、衣裳や皮膚を剥ぐという「おれ」の行為や欲望に焦点化したのが、作中における皮膚へのアプローチとして、皮剥ぎの他に「保護色病」があることを忘れてはならないだろう。病、とりわけ伝染病や皮膚病のイメージは脱皮や皮剥ぎとは別の文脈において、皮膚境界を混乱させる皮膚への侵入を表象するものである。ベンティーンによると皮膚が身体を覆っているという身体観以前には、皮膚は多孔性の開かれたものであった。身体境界は皮膚とイコールではなく、内部と外部は混じり合うグロテスクなものとして捉えられていたのである。その時は「病気とは個々人の内部で生じる体内プロセス」として理解されていた。

病気に対して感染の危険が意識されるようになったのは、皮膚が閉じたものとして意識されるにつれてである。「接続の場所たる皮膚は、いつ何時生じるかもしれない貫入と感染の、第一の危険区域となる」と理解されるようになる。ここにおいて伝染病や感染症は、個別性に対する攻撃を伴った侵入のイメージで捉えられるようになる。こうした病気に対する観念の移り変わりは皮膚病に対して顕著に表れている。ベンティーンは皮膚科の模写の画像の描かれ方を分析する中で、皮膚病における瘡が皮膚に貼りつくものから、皮膚を破壊する傷へと変化していくことを読み取っている。

十八世紀末には皮膚病は皮膚の上でできたいぼやしみとして示されたのになら、十九世紀には、皮膚の下まで浸食し、皮膚を切開し、入念に閉ざされた肉体を残酷にも（ふたたび）開く傷、という幻想が生まれた。

(クラウディア・ベンティーン『皮膚 文学史・身体イメージ・境界のディ
スクール』^④)

つまり皮膚の内への侵入は、閉じた表面を突き破る暴力として認識されるのだ。グロテスクな開いた皮膚認識の時とは違って、皮膚への侵入は「傷」として認識されるようになる。なめらかな表面を壊す攻撃であり、恐れ忌避すべきものとなるのである。

さて、「おれ」の語る「保護色病」はこのような暴力や攻撃としての皮膚病とは少し違った印象を持っているようである。「保護色病」は皮膚病でありながら、その症状は「傷」として認識されない。中身を露出させるものでありながら、「傷」や「皮剥ぎ」とは違い、表面は傷つかず、ただ透けるだけである。「おれ」は当初この病を、皮膚の延長たる衣裳の役割に皮膚が追いついたものだとしている。

つまり、人間は、自分の皮膚が社会の発展にとっても追いつけなくなつたので、代用の衣裳でもつてその補いをつけようとしているわけなのです。しかしそれでもなかなか追いつけない。その欲望に満足という字はないのです。そう考えていけば、この欲望が、やがて、——もしそれが可能なことであるならば、皮膚の上にも直接変化として現れるということも、充分考えられるのではないのでしょうか？

(六四頁)

衣裳の延長としての皮膚を生産する「保護色病」は、しかしながら剥ぎ取るべき「第二の衣裳」という印象とは全く別の病として語られていく。この病は社会性や階級性を表す皮膚を作り出すのではなく、皮膚を、覆いや被膜としてではなく、浸透性を持つ、穴の開いた、透明なものとして機能させていく。

して機能させていく。

「おれ」は「保護色病」について様々な症例を物語のように「女」に語って聞かせる。興味深いのは、この病が皮膚へ働きかける際に境界としての皮膚の役割をことごとく無効化するような意味合いを持たされていく点である。語りの中で病の性質は次々と変化していく。

例えば「海におぼれかけた少女が、急に海と同じ色になったため、切角そばまで来た舟に見分けられなかったこと」や「猟師が、森の中で、突然周囲の緑に同化し、仲間を撃たれてしまったこと」といった「保護色病」という病名の通り、皮膚が保護色化してしまい周りと一体化してしまふ症例が最初に語られる。次に語られるのは欲しい洋服を見たために「その服と同じ縞模様を皮膚に現した」少女の話や「発禁の春画」が額に現れる重役の話であり、自身の欲望や、見たものを皮膚にあらわすといった症例である。前者は外側から内側からの侵入であり、後者は秘匿することやプライバシーを無効化するような内側から外側への侵犯である。どちらも皮膚という自他の境界が曖昧になることが描写されている。

次に語られるのは色の変化が感覚や感情を伴うという知覚への作用である。「皮膚の色が変わろうとするとき、必ずその色に対応した独特の感覚を伴うものであるらしい」と「おれ」は言いながら、様々な色と感覚と感情の相関関係を列挙する。

赤は情欲のほてり、黄は勝誇った自負の感覚、緑は死の不安に似た冷たさ、青は倦怠、紫はロマンティックなむず痒さ、黒は腹立たしい痛み、白は甘えるようななめらかさ。(六七頁)

ここでの感覚や感情は、皮膚の色に対応して喚起されるものである。

外部から与えられ皮膚に転写される色が、内部の感覚や感情まで操ってしまうという症状がここでは説明されている。しかし、色から感覚感情へと因果関係は時折転倒する。「おれ」は「女」の皮膚が白くなってしまうと信じ込ませた後、耳元で「白、甘えるようななめらかさ」と、色と感情の相関関係を再度説明する。阿片によって朦朧とした意識の「女」に「おれ」は暗示を与えているのだが、この暗示は白くなったために甘えるようななめらかさを感じているのか、甘えるようななめらかさの感覚が白色として露出しているのかを不明瞭にさせる。また結末部における「おれ」の変色は「おれの皮膚は死の不安に似た冷たさを感じ、暗い緑色に変っていた」と、感覚と感情が先だつて変色を誘発するという順序となっている。

感覚や感情を色によって表すものとしてこの病が意味づけられる時、この変色はプライバシーの侵犯となる。皮膚をスクリーンとして隠すべき感情が表れ出てしまう。もはやここで皮膚は覆い隠すという機能を失っている。「保護色病」は閉じた境界としての皮膚ではなく、侵入し漏れ出てしまう、開いた皮膚を作り出すものなのである。

衣裳や皮膚を剥ぐ行為からも明らかのように「おれ」は秘匿されたものを暴き出そうとし続けている。それは「おれ」の復讐の完了が「印鑑」の「隠し場所」を暴き出すことから推察できる。ただ、「保護色病」において特異なのは、剥ぎ取り、暴く、といったイメージからは無縁であるということである。グロテスクな内部と外部が入り混じる皮膚は最早剥ぎ取ることもできないものである。傷つけようとしても傷つけることができない、傷が傷として機能しないものとして、この皮膚は存在している。「保護色病」になった皮膚は、内から外へ、外から内へ、流れ出すことの可能な多孔性の表面となり、暴力や書き込みや、あるいは解放や脱皮が意味をなさないものとして成立しているのである。

四 「おれ」のアイデンティティ認識

皮剥ぎにしる、「保護色病」にしる、「おれ」は過剰なまでに皮膚に執着しているようである。「おれ」の皮膚への執着は、おそらく皮膚が他者の境界であり、身体境界として機能するものであるということに起因しているだろう。自他境界や身体境界としての皮膚は、「おれ」であるものを取り入れ、「おれ」でないものを棄却することで「おれ」を決定づけるものである。「おれ」の皮膚へのこだわりは、「女」の衣裳や皮膚を剥ぎ取ること、「女」のアイデンティティを剥ぎ取ることを欲した点からも、階級や社会的役割としてのアイデンティティに関連すると捉えられる。

類出する「中国人」「中国」という語などから、作中の舞台は満州であると思われる。そしてそこで暮らす「おれ」は、飢餓状態や就職のなさなどから考えて、おそらく「棄民」と規定されるような存在である。

このような状況にいる「おれ」は、確かに満州において宗主国側の人間ではある。しかし「おれ」は確固たる植民者としての認識を自他共に持つことができない。「おれ」は周縁に位置づけられる人間なのだ。対極には、中心に位置づけられるような強固な植民者としてのアイデンティティがある。

アイデンティティが構築される際に行われるのは「取り入れ」と「投影」による自己認知である。自己であるもの、自己にとって望ましいものや快いものを承認し「取り入れ」、自己でないもの、自己にとっておぞましいものや不快なものを否認し外部に「投影」——外部に棄却することによって、自己というアイデンティティが形成される。

このプロセスにおいて重要なのはアイデンティティの構築が「取り入れ」という自己承認のみで成り立っているのではなく、「投影」という否認によっても成り立っているということである。自己の範囲とそれを画

定する境界は、自己ではないものの画定なしには存在できない。つまり、中心として位置づけられる強固な植民者としてのアイデンティティを否定されることによって、「おれ」のアイデンティティは周縁に、外部として、位置づけられていくのである。

そうであるとすれば、「おれ」の状況は屈折していることになる。「取り入れ」と「投影」の際、自己として承認するものは、自らに快樂として認識されるものである。逆に自己にとって否認すべき不快なものは自己でないものとして外部へ「投影」される。「おれ」の周縁に位置づけられるようなアイデンティティは「おれ」にとって不快な、否認すべきものでもある。このような、いわゆる承認されないアイデンティティを自己として取り入れる者は、「自己の外部に放棄すべきものを、自己の内部にとどめておく（状況に陥る）こと」によって、嫌悪や恐怖を自分自身に振りかけていく^⑤ことになる。

こうした事態に「おれ」を決定的に落とし込むのは、「女」の侮蔑的な態度であろう。「おれ」の憎悪は「女」がとった侮蔑的な態度に端を発している。「おれ」を家の前で見つけた「女」は、汚らわしいものを排除するといった仕方では「おれ」に接するのだ。「女」の命令を受けた朝鮮人の運転手は「おれ」を蹴る。中国人女中は追い打ちをかけるかのように、犬を放つ。これが「おれ」の憎悪の発端となるわけだ。「女」から「おれ」に対する対応は「おれ」を汚らわしいものとして規定するものである。すなわち、「女」の対応によって、「おれ」は自身のアイデンティティを否認すべきものとして捉えていくことになる。

だが、「おれ」は「おれ」自身を汚らわしい否認すべきものとして位置づけていくような視線を、どうして取り入れてしまうのだろうか。ここには「おれ」の「女」に欲望されたいという欲望が介在しているように思われる。

文化の認識格子によって承認された対象——したがって「快樂」として認知されたもの——を、人は自我のなかにみずからの欲望として取り入れる。だから欲望はつねにすでに他者の欲望であり、他者が自分に対して望むものを、みずからの欲望として、みずからの身体として、みずからの自我として差し出す。

（竹村和子「アイデンティティの倫理」『愛について—アイデンティティと欲望の政治学—』^⑥）

「取り入れ」と「投影」の際の承認と否認の振り分けには、他者の視点や欲望が介在している。「承認された」「否認された」を分節する価値判断基準は自らの中に本質的に生起するものではなく、他者の欲望を自らに引き受ける結果なのである。他者が自らに対して欲望するものを、自らにとって望ましいものとして承認し取り入れる、この時自己は他者に欲望されることを欲望している。

「女」の態度が「おれ」の憎悪を引き出すということは、「おれ」が「女」に別の態度を欲望していたというこの証左でもある。しかし「おれ」の欲望に反して、「おれ」の立ち位置を「女」は汚らわしいと態度で示し、「否認された」アイデンティティとして位置づける。換言すれば「女」は「おれ」ではないアイデンティティを「承認された」「望ましい」アイデンティティとして認め、欲望していることになる。「おれ」が「女」に憎悪を抱くということは、つまり「おれ」を欲望しない「女」が憎いということであり、この憎悪は「女」に欲望されたいという欲望と裏腹の関係にある。つまり「おれ」は「女」に欲望されるような「おれ」でいたいのである。ここにおいて欲望されたいという欲望は、「承認された」「望ましい」アイデンティティを持ちたいという欲望になる。「おれ」は「否認された」「おれ」を「おれ」の中から投げ出したいのである。

ならば「おれ」の「女」に対する復讐と、「承認された」アイデンティティを獲得したいという欲望は裏表であるということになる。こうした「おれ」のアイデンティティの構築における認識と皮膚認識との関わりは前述からも明らかであるが、しかし、作中における皮膚表象はむしろアイデンティティを安定させないように働いてゆく。安定的でない自己や身体境界を産出するべく皮膚は変容してゆく。

以上を鑑みると、結末部における「おれ」の皮膚の変色は、「おれ」のアイデンティティ認識が「承認された」「否認された」の明確な境界を持たない安定しないものに変容したということになるのではないだろうか。もしそうであるならば、それはどのようにして起こるのだろうか。「おれ」のアイデンティティ認識の変遷を見る必要があるように思われる。

五 飢えの変遷と身体の変遷

作中ではあらゆる欲望が「飢え」という言葉で表現される。例えば冒頭部で述べられる「飢え」は食欲であったが、「女」への復讐に際しては性欲に接続する。最終的に「おれ」は自身が飢えているのか否かを判断できなくなり、復讐の完了と呼応して「飢え」は対象を見失ってしまう。このように作中における「飢え」はあらゆる欲望を表現する言葉である。「おれ」の憎悪が、欲望されたいと欲望することと表裏一体の関係であるならば、「飢え」と表現される欲望の変遷は「おれ」のアイデンティティ認識の変遷の手掛かりとなるはずである。「おれ」の「飢え」が変遷する過程について考えたい。

当初、「飢え」という言葉が示していた欲望は食欲であった。ここで描写されているのは極限の飢餓状態である。「おれ」は飢えているが、食物

を胃が拒否して嘔吐してしまうという状態におかれている。「飢え」という言葉の印象が指し示すように、欲望とは欠如である。つまり「おれ」でないもの、「おれ」の持たないものである。ここでの「飢え」は、食べられないという禁止を受けて食欲という欲望が産出され、同時に否認される状態である。

こうした状態にありながら、「女」への復讐を決めた後は極限の飢餓は描写されなくなる。「女」への憎悪が「おれ」を「女」に復讐することだけがおれの存在している理由のように「思わせるのである。自身の生存を復讐よりも下位に置き二義的なものへとしようとする「おれ」だが、しかし身体は「下腹」を「鳴らす」ことで、飢えと身体存在をなお訴えている。「女」への復讐の際、繰り返されるのは「下腹が鳴った。おれは餓えていた。」という一文である。

腹が鳴るといふ空腹感の身体反応を、「おれ」はここではあえて「腹」ではなく「下腹」と表現する。下腹部という言葉から連想されるように、「下腹が鳴った」という表現の採用は性的な意味合いを付随させる作用を持つ。さらに、「下腹が鳴った」という文の前後に、「おれ」の性的な視線が描写されることも重要であろう。「肩と脛の全部が露わ」「膝までまゐる出し」、また「手足は少年のように細く、しかも熱れきった洋李のようにやわらかそうだった」というように、「おれ」の視線と描写は「女」を性的な対象として表現していく。また、「熱れきった洋李のようにやわらかそうだった」という表現には、明らかに食欲と性欲とが隠喩によって接合された混線の跡を見ることができるといえる。このように「おれ」は、腹が鳴るといふ食欲を表す身体反応を、レトリックによって性的な欲望へと置換させていくのである。そうすることで欲望の対象は食物から「女」へとすり替わる。

こうした欲望の置換について、竹村和子はそもそも欠如を埋めるもの

は置換によって代理されているものであると、精神分析の理論を使いながら説明している。

欲望が何かを「求める」ものであるかぎり、欲望は欠如の別名である。そして人間にとって、欠如を埋めるものは、欠如したものの自体ではなく、置換によって代理されたものとなる。なぜなら泣き叫ぶ幼児の要求を言語化して聞きとる養育者をつうじて、快感の満足を与えられる人間は、生存の与件において、すでに言語という「欠如」と「置換」を前提としているからだ。言い換えれば、要求はつねに言語によって翻訳され、したがってつねに置換され、始原にあるものは、それ自体を取りだすことはできない。

(竹村和子「愛について」『愛について—アイデンティティと欲望の政治学—』)

欲望はそれ自体名づけられない欠如として存在している。しかしそれは言語化しなければ手に入れることも満たすこともできない。故に、欲望は言語の次元で、言語によって言い表せるものに置換されるのである。だから「おれ」は、あらゆる名づけられない欲望を、当初は食欲であった「飢え」に言いかえてゆくのだ。

生存に関わる食欲としての飢えが解消されるにつれて、この「飢え」は「飢え」でありながら「飢え」でないものとして「おれ」を混乱させ始める。何らかの欲望が存在しており、それは「飢え」と表現するしかないものであるが、これは当初の空腹感という意味の「飢え」ではない。物理的に食欲を満たすことを達成した「おれ」は、その後何度も「おれはもう餓えていないのだろうか？」と繰り返す。自問自答の中で、「おれ」は自身の憎悪を思い出し、「やはりおれは餓えている」と結論付ける

が、明らかに「飢え」は食欲からは遠ざかっている。「おれ」はこうした自問自答を繰り返しながら、自問の段階では対象も目標も判然としない欲望を、自答することによって方向づけていくのである。そして復讐の完了時、「おれは始めて本当の情慾でもって女を抱いた」。「おれ」は「本当の情慾」というが、食欲も復讐欲も一応満たされたために、欲望を「情慾」すなわち性欲として方向づけざるを得ないのだ。

復讐を完了した後はどうとう自身の問いに答えられなくなる。「おれはもう餓えていないのだろうか？」という問いの背後には、何らかの欲望が想定できるが、「おれ」はそれを比喩によっても言語化できなくなってしまうのである。この結末部において、「おれ」の皮膚は緑色に変色してしまう。

執拗に「おれはもう餓えていないのだろうか？」と繰り返す「おれ」は、「飢えない」「おれ」になりたがっているようである。「女」の態度によって自身を否認すべきアイデンティティを持つと認識し、承認されるアイデンティティの獲得を欲望した「おれ」であるが、ここで「おれ」は否認すべき対象として「飢える」「おれ」を想定していたのではないだろうか。「飢える」「おれ」を自己から棄却するために、「おれ」は何度も何度も自身が「もう餓えていない」かを確認する。

しかし「おれ」は「飢え」続ける。「飢えない」「おれ」を欲望することもまた「飢え」である。何故なら欲望は欠如であり、「飢える」「おれ」と「飢えない」「おれ」は対置される関係にあるからだ。アイデンティティ構築のプロセスでは「取り入れ」と「投影」はそれぞれ相補的な関係にあり、自己は、「——である」故に「——ではない」という二分法によって決定されることになる。つまり「飢える」「おれ」を棄却し「投影」したいと願うことは、「飢えない」「おれ」を欠如として認識し、「飢えない」「おれ」を取り入れたいと欲望することなのである。

また、この「取り入れ」「投影」のプロセスは、自己を言語化すること
で認識するプロセスでもある。「取り入れは〈言語〉という象徴界に、自
己を言語化することによって適合するプロセス」であり、「他方、投影
は、自我の内部で説明できず納得できないもの（おぞましきもの）を
棄却すること¹⁸⁾」である。

他方、投影は、自我の内部で説明できず納得できないもの（おぞまし
きもの）を棄却することであるので、本来的には〈想像的なもの〉で
ある。棄却は、自己（自己の輪郭をいまだ有していない段階を含めて）と
外界が接触するさいに、外界の言語（文化の認識格子）ではどうして
もすくい取れず、不安な残余として滞留するものを、自己の統合性
を得るために、自己のそとに放出することである。したがって棄却
されるものは、本来は言語によって分節化されえない未知なるもの、
不安にさせるもの、恐ろしいもの——つまりフロイトの言う「不気
味なもの」——であるはずだ。／しかし投影は、不気味なものを自
己の外部へ棄却するのみならず、他の人か物にそれを「投影」する
——形象化する——ことでもあるので、自己の内部で分節化しえな
い想像的なものは、投影によって、象徴的に対象化されることにな
る。不気味なものには、否定される「何か」としての形象（名前）が
与えられるのである。逆に言えば、不気味なものが放出される外界
は、〈言語〉が支配するシステムであるので、分節化しえない想像的
なもの、言語化されて象徴的なものに形質変化しなければ、外界
に放擲することはできない。

（竹村和子「アイデンティティの倫理」『愛について—アイデンティティと

欲望の政治学—』¹⁹⁾

棄却し、「投影」した「想像的な」「おぞましきもの」は言語化される
ことによって「象徴的な」ものへと変化する。したがってそれは、「自己
のなかの「おぞましきもの」の現れ（現前）ではなく、その表象（再・現前）
である」とされる。外部に棄却「投影」したものは、自己の中の「おぞ
ましきもの」と同一ではないのだ。つまり自己のうちにある「想像的な」
「おぞましきもの」は自己の中に「残余」として残り続けるのである。

「飢え」続ける「おれ」は、変色の段階において自らの欲望を説明でき
なくなっている。欲望を比喻によって置換してきた「おれ」だが、今回
は比喩表現によっても自身の欲望を説明できないのである。言語化でき
ないものとして「おれ」の中に「おぞましき」「残余」が返ってくる場面
として、この変色の場面は読むことができる。言語化できないが故に棄
却することも「投影」することもできない、「おれ」の中にある／「お
れ」自身である「おぞましきもの」が、「おれ」のアイデンティティを非
安定化してゆく。

「死の不安に似た冷たさを感じ」るこの皮膚の変色は、皮膚が、身体
が、なんらかの違和を訴えて変質しているかのような描写である。言語
化できない「飢え」に、今度は言葉ではなく身体がひたすらにひずみを
訴え続けているようである。

実はここで「おれ」に、「女」との性交において反復したプロセスが
戻ってきている。「おれ」は「女」に阿片を与えないことで禁断症状を作
り出し、「女」は禁断症状という「飢え」の感覚を変色しそうな感覚とし
て表現した。「おれ」は言葉にできない「飢え」を、「女」との性交で繰
り返し、そして繰り返された言葉に倣って身体に表しているのだ。

先に確認した通り、この作品における皮膚表象は皮膚／身体境界とし
ての自明性を覆す性質を持っていた。皮膚を剥ぎ取ること、そして保護
色病にするという二つの側面からの皮膚への働きかけは、自他と身体と

の境界を曖昧化し、自己の安定性を壊すものである。つまりここにおいて「おれ」に返ってきた変色は、「おれ」のアイデンティティを絶えず揺さぶり安定性を奪うものとなるのだ。変色する「おれ」は「承認」「否認」「取り入れ」「投影」の二分法によって境界が設定され決定されるようなアイデンティティ認識から逸脱してゆくことになる。「おれ」の「飢え」は解消されることなく、変色する皮膚は「飢え」を表し続けるが、「おれ」の「飢え」が継続する限り「おれ」は絶えず「おれ」を問い直し更新し続けるのである。

註

- ① 「文学界」一〇月号、文芸春秋社 一九五一年一〇月
- ② 谷川渥「安部公房の皮膚論」「ユリイカ」第二六巻第八号、青土社、一九九四年八月
- ③ 小林治「昭和二十年代の安部公房短編作品について(一)―変身と身体をめぐる―」「駒沢短大国文」第二九号、一九九九年三月
- ④ 谷川渥「安部公房の皮膚論」(前掲)
- ⑤ 小林治「昭和二十年代の安部公房短編作品について(二)―変身と身体をめぐる―」(前掲)
- ⑥ トマス・カーライル『衣服哲学』(石田憲次訳)岩波文庫、一九四六年七月(原著は一八三六年)。なお、『他人の顔』(『安部公房全集』第一八巻新潮社 一九九九年三月)などでもトマス・カーライルの名が出てきており安部がこの思想を取り入れていた可能性は高い。
- ⑦ アンドレア・ドウォーキン「皮膚の喪失」『インターコース』(寺沢みづほ訳)青土社、一九八九年八月(原著は一九八七年)
- ⑧ クラウディア・ベンティーン『皮膚 文学史・身体イメージ・境界のディスクール』(田邊玲子訳)法政大学出版局、二〇一四年五月(原著は一九九八年)

- ⑨ ミシェル・フーコー『監獄の誕生―監視と処罰』(田村俶訳)一九七七年九月(原著一九七五年) 三三頁
精神は一つの幻影、あるいは観念形態の一つの結果である、などと言ってはなるまい。反対にこう言わねばならないだろう、精神は実在する、それは一つの実在性をもっている。しかも精神は、身体のまわりで、その表面で、その内部で、権力の作用によって生み出されるのであり、その権力こそは、罰せられる人々に―より一般的には、監視され訓練され矯正される人々に、狂人・幼児・小学生・被植民者に、ある生産装置にしばりつけられて生存中ずつと監視される人々に行使されるのだと。
 - ⑩ ジュディス・バトラ『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子訳)青土社、一九九九年四月(原著は一九九〇年)
 - ⑪ クラウディア・ベンティーン(前掲書)
 - ⑫ クラウディア・ベンティーン(前掲書)
 - ⑬ クラウディア・ベンティーン(前掲書)
 - ⑭ クラウディア・ベンティーン(前掲書)
 - ⑮ 竹村和子「アイデンティティの倫理」『愛について―アイデンティティと欲望の政治学―』岩波書店、二〇〇二年一〇月
 - ⑯ 竹村和子「アイデンティティの倫理」(前掲)
 - ⑰ 竹村和子「アイデンティティの倫理」(前掲)
 - ⑱ 竹村和子「アイデンティティの倫理」(前掲)
 - ⑲ 竹村和子「アイデンティティの倫理」(前掲)
 - ⑳ 竹村和子「アイデンティティの倫理」(前掲)
- 【付記】安部公房「飢えた皮膚」の本文引用は『安部公房全集』第三巻 新潮社 一九九七年一〇月を使用した。引用文の頁数は、全集の頁数である。なお引用における「/」は改行を意味している。

(本学大学院博士後期課程)